

部活のない日

織山凧は早足で校門に入る。少し荒い息は白みを帯びていた。職員室で部室の鍵を貰い、さっきよりペースを上げて部室に向かう。ガチャ。ガラガラ。ピカッ。ピッ。ドサッ。一旦深呼吸。埃くさい部室だが、妙に温みがある。凧は何年も前に作られたと思いきベンチに腰掛け、脚本担当の青原梨沙から送られてきた台本を読むことにした。彼女の描く世界は、繊細で、まぶしい。まるで草原で微睡んでいるような心地にさせてくれる。高校の演劇は六十分程度なので、描けるストーリーにも限度がある。膨らませすぎると六十分では終わらないし、逆に膨らませないとどこにでもあるような冗長的な話になってしまう。しかし彼女の脚本は、細かい部分を端折りつつもしっかり観客の心を掴んで離さない魔性の魅力がある。口には決して出さないが、凧は青山の書く脚本が好きだった。それと同時に、こんなにいい脚本が書けるなら強豪に行ったほうが良かったのでは、とも思っていた。凧たちが通っている高校は二年生いっぱい部活を引退しなければならぬので、必然的に三年生も夏の大会に出場する他校より不利になる。昔はこの学校もそこそこの演劇部が強かったらしいが、今の部員は一年生が六人いるだけである。ついに今年は地区大会にも出場しなかった。見る影もない。当然金がないので設備はボロボロで、顧問によれば、地区大会に出場していたときも衣装や小道具もかなり使い回していたらしい。こんな劣悪な環境で、青山の脚本の良さが活かせるのだろうか。悩みを振り払うかのように頭をぶんぶん振って、凧は自販機に向かった。

青原梨沙は自分の部屋のベッドで寝ている。毛布を家族から全て拝借して頭から被っているが、寒気は止まらない。ピピピ。ピピピ。体温計には三十九・二度と表示されていた。

「クソ・・・」

ゴホッ。ゴホッ。ズビズビ。梨沙は、どうせ風邪を引くのであったら、冬休みではなく学校がある時に引きかかった、と思った。今日は晴奈とミュージカルを見に行くつもりだったのに。とりあえず、映画を見よう。何回も何回も見返すくらい大好きな作品。今日もこの映画の元になったミュージカルを見に行くつもりだった。風邪を引かなければ。梨沙が今抱く感情の大半はこの映画で知ったと言っても過言ではない。梨沙はいつしか夢を抱くようになった。このミュージカルに出

演したいという、今にして思えば大それた夢だ。しかし、そんな夢を叶えるためにやれることはなんでもした。小さい劇団に入って、歌と演技を学んだ。ずっと続けていて、それなりにいい役も貰えて、それなりに大きい舞台にも立った。足りない。もっといい役に、もっと大きな舞台に立つためには。ずっと思っていた。中二の、ちょうど今の時期に、声が出なくなった。小さな公演のために通し練習していた時、声の出し方がわからなくなった。舞台を降りたら、喋れるようになった。次の日も、その次の日も、舞台の上では声が出ない。周りの人から止められて、劇団を辞めた。哀れみの目で見えるな。親からは好きなようにしろ、と言われたので、休日に舞台やミュージカルに沢山行つて、暇があったらミュージカル映画を見たり、脚本を読んだりした。気がいたら、自分で脚本を書いていた。自分のこの行き場のない感情をどうにかするために、書いた。誰かに見せるためではなく、自分のためだけに。(それが今、私が演劇部の脚本担当だもんなあ)と梨沙はしみじみ思った。結局、憧れは止められない。今の夢はでかく全国大会。強豪では悉く梨沙の家から遠かった。超弱小校でもできなくはないでしょ、下剋上って格好いいし。そんなことを考えながら梨沙はティッシュを探しにフラフラと部屋を出た。ヘクシヨン。

田中飛輪は校舎裏に呼び出されていた。相手が九時に校舎裏に来てほしいと言ったのに遅刻するんだ、と飛輪は思った。用件はだいたいわかってはいるけど、一応五分前に来た。ぼーっと待っていると、タツ、タツ、と足跡が聞こえてきた。

「田中くん、ごめんね。わざわざ学校まで来てもらっちゃって。待ったよね」

「うん。待ったけど。それで用件は。」

「あ……。あの、田中くん。私と、付き合ってください」

「ごめん、無理。」

グスグス泣き始めた相手に背を向けて昇降口に向かう。今日は部活はないけれど、どうせ部室に風がある。なぜ皆俺と付き合えると思っているのだろう、と飛輪は思った。可愛い子を振っただけで変な噂を立てる男も、ちょっと有名で、顔が好みだからって安易に告白してくる女も嫌い。飛輪は演じることが好きで、周りの人は飛輪の顔が好き。子役をやっていた時も、演じることは好きだったけど、顔が整っているという理由で評価されて色々なドラマに呼ばれることには嫌気がさ

していた。芸能界から逃げても、過去はついて回るから平穩は訪れない。友達はできないけれど、囲いとアンチができる。そんな中、部活の仲間だけは自分のことを一人の役者として評価してくれていた。

「そこそこ演技は上手いけど声通らないよね、あんた。毎日腹筋三百回ね。」

と梨沙に言われた時には自分の演技を割と正當に評価された喜びのあまり満面の笑顔で腹筋を行った。ずっと飛輪の足を押さえていた風は苦虫を嘔み潰したような顔だったが、それだけ嬉しかった。この部活が好きだ。みんな演劇に真摯に向き合っていて、まぶしい。まだ入部して一年も経っていないけどずっとここにいると思うる安心感がある。二年生がいないから、今年度の大会は出れなかったけれど、来年度は出たい。そして世間を見返してやるのだ。田中飛輪は顔だけではない、と。そんなガラガラとした野望を胸に浮かべながら飛輪は部室に向かった。

七瀬晴奈は劇場の前に居る。演技の研究のためにミュージカルを見に来た。今は開場待ち中だ。しっかり学んだことを書くためのノートと筆箱を用意していることを確認した。思ったことを書く準備は万端だ。元々演劇部に入るつもりはなかったのに、自分でも凄いのめり込み様だ、と晴奈は思った。今の三年生が引退して部員がゼロになった演劇部をなんとか存続させるために、同じクラスの梨沙に熱烈に勧誘された。まあ楽しそうだしいいか、と入部した。まんまとハマった。演劇部として初めての発表の場だった文化祭での劇は晴奈が失敗してしまったところがいくつもあった。悔しい。もっと演技が上手になりたい。そんな晴奈を、周りの皆が手助けしてくれた。いつもはあまり話さないけど的確な指示をくれる織山くん。私を演劇の世界に導いてくれて、熱意を持って接してくれる梨沙。たまに気持ち悪くなるけどいつもはとてもいい演技をしている田中くん。いつも盛り上げてくれて声がとっても大きい三浦くん。梨沙にベツタリでとっても可愛い風景。まぶしい彼らを思い出すだけで、自然と笑みが溢れた。今日見に来たミュージカルも、梨沙がおすすめてくれたものだ。彼女の人生を変えた名作。本当は梨沙と観に来る予定だったが、彼女が風邪を引いてしまったので一人で来た。今日一緒に行けなくなったと電話が来た時、半泣きで私の分まで楽しんできて、と大声で捲し立てられてつい笑ってしまった。色々考えているうちに開場時間になった。チケットを渡して、もぎってもらおう。ピリピリ、というチケットの音が好きだ。ワクワクした気持ちになれるから。晴奈ははやる気持ちを抑えつつ劇場に入った。

三浦海斗は盛大に寝坊した。特に予定はなかったが、それにしたって十二時起床は遅い。父も母もまだ仕事があるし、兄弟は皆出かけてしまった。とりあえずご飯作るか、と思いのそのそとベッドから起き上がる。ドッ。パカッ。チッチッチッ。ボウッ。ジュー。カチャ。カチッ。バサー。トクトク。カチャカチャ。誰もいないリビングのテーブルの定位置の椅子に座り、卵をのつけたパンとコーヒをいただく。今日は何をしようか。気が向かないが宿題をしなければ、と海斗は思った。冬休みは部活が沢山入っている。早めにやっておかなければ、この量は終わらない。スマホで宿題をまとめた表を見ながら渋い顔をする。

「部活してー」

海斗は無意識に呟いていた。現実逃避という意味もあるが、それ以上に海斗は演劇が好きだった。中学の時は最初に仲良くなった人に合わせてサッカー部に入ったがあまり合わず、微妙にやりづらい気持ちを抱いていた。高校では自分の意思で入る部活を決めよう、と考えていたが、同じクラスの梨沙に猛プッシュされ結局演劇部に入部することにした。最初の方こそやる気がなくてよく部活をサボったりしていたが、最近あまりサボっていない。サボると梨沙に怒られるから、というはある。一回本気で怒らせてしまい痛い目に遭った。今思い出しても身震いする。それでも辞めようとは思わなかった。台本を覚えるのは遅いし、よく囁んじやうし、立ち位置はしょっちゅう間違えるし……。苦手なことは多いけれど、その分できた時の喜びが大きい。文化祭の劇は本番が今まででいちばん上手く演じられて小躍りしたらみんなに笑われた。風曰く声量が豊かだし、声質もいいらしいから演技さえ身につけばもっと伸びるとのことだ。そんなことを言われてしまったらやるしかないだろう。夏休みの宿題を全然提出しなかったら補講を食らってしまい部活に参加できなくて梨沙に叱られたので、冬休みの宿題はしっかりやらなければいけない。カーテンを勢いよく開ける。太陽がまぶしい。海斗は課題を探しにリュックを置いている自室に向かった。

千明千景は迷子になっている。気になっていた映画を見るために一人で映画館に向かったら迷子になってしまった。スマホは充電が切れてしまったので、もうどうしようもない。諦めてカフェに入ってフラッペとミルクレープを注文した。充電器を持ってきたら充電できたな、とカウンター席に設置されたコンセントを見ながら考える。小さいカバンで来たのがよくなかった。次は紙の地図と充電器を持ってこよう、と千景は思った。

ぼくはちよつとずれている。不思議ちゃん、天然、間抜け。それがぼくに下される評価。空気が読めないから、いつもよくないタイミングに発言してしまう。

「こちらご注文のお品物ですー」

「ほえ！」

まだだ……。ぼうっと考え事をしてたおかげで話しかけられて変な声を出してしまった。恥ずかしさで顔が真っ赤になっている。入学したての時もこんなことがあった。勉強もとても得意というわけではないし、運動もとても得意というわけではない。芸術方面に秀でてでもない。そんなぼくを演劇部に勧誘するために梨沙さんが声をかけてくれた。

「ねえねえ君！演劇部に入らない？一躍スターになれるよ！」

「ほえ！」

最初の自己紹介で失敗したぼくを氣にかけてくれたのかと思ってとっても嬉しくなっていたが梨沙さんは別のクラスだからぼくのこととは全く知らない。勝手に舞い上がっちゃった。でも、その後も梨沙さんが至らないぼくのためにいっぱい指導してくれて、人並みに演技ができるようになった。さすが梨沙さん。結構強引だけどカッコいい。まぶしい。ぼくたちの太陽！そういえば梨沙さん、今風邪引いてるんだよね、大丈夫かな。心配するメッセージを送ろうとしてスマホの充電が切れていることを思い出した。ダメダメだあ。渋い顔をしながらミルクレープを食べる。すごい美味しい！フラッペも美味しい。あっという間に完食して、店を出る。今日は映画館は諦めて家で他の映画を見よう！

千景は駅とは反対方向に歩き出した。